

平成27年度国立天文台研究集会開催報告書

平成27年10月30日

国立天文台長 殿

代表者	氏 名	(ふりがな) かわばた こうじ		
		川端 弘治		
	所属・職	広島大学宇宙科学センター		
	電話	082-424-5765	E-mail	kawabtkj@hiroshima-u.ac.jp
研究集会名	2015年度光学赤外線天文連絡会シンポジウム：光赤外スペース将来計画			
開催期間	2015年 9月14日 ～ 2015年 9月16日			
開催場所	国立天文台 三鷹キャンパス すばる棟大セミナー室			
参加人数	102名			
研究集会の概要	本シンポジウムは光学赤外線天文連絡会（光赤天連）が例年開催しているものであり、今年度は2年掛かりで取り組んできた「光赤外将来計画検討報告書」の10年ぶりの改訂版が本年度末に発行される見込みとなっていることを受けて、執筆を担当している各班から現状を報告してもらおうと共に、この1年間の周辺状況の変化を踏まえつつ、全体の整合を図るなどの取りまとめの方針を議論することを目的として開催した。また、シンポジウムの中で、スペース計画の工程表の改訂、分野横断型プロジェクトの推進といった分野全体で取り組んでいくべき事項に関する討論や、2030年代以降の光赤外天文学の展望や多波長・国際協力のあり方についても意見交換を行い、報告書のとりまとめの一助とすることも目標とした。 プログラムの構成と講演数は以下の通りである。 9月14日 1：イントロダクション・検討報告書編集委員会報告（2講演） 2：地上班報告および関連状況（12講演） 議論 9月15日 3：スペース班報告および関連状況（7講演） 議論 4：分野横断型プロジェクトと関連状況（4講演） 5：サイエンス班報告議論（12講演） 懇親会（東大生協天文台店） 9月16日 6：将来計画および検討報告書の最終とりまとめに関する総合討論（電波分野1、X線・γ線分野1を含む4講演） 議論 世話人：青木和光（国立天文台）、秋山正幸（東北大学）、川端弘治（広島大学）、栗田光樹夫（京都大学）、佐藤文衛（東京工業大学）、松原英雄（JAXA）			

研究集会の成果	本シンポジウムは、光赤天連を中心とした様々な分野の研究者・大学院生のべ100名近くが一同に会して行われる、国内の光赤外分野における貴重且つ重要な会議と位置付けられる。今回も、次のような項目・観点での議論において、具体的な進展・指針が得られた。 まず、検討書の構成について、この検討書が持つ使命として各プロジェクトの予算獲得をコミュニティとして支持することが挙げられることや、念頭におくべき読者層が会場にて再確認され、その効率を高めるため、章構成の再編に関する具体策が話し合われた。検討書全体としては400ページに達すると見込まれるが、分野外の方々に読んでもらうため、20ページ程度のエグゼクティブ・サマリを設けることや、その構成案に加え、英語訳を作成しウェブ公開することなどが議論された。 地上計画においては、TMT時代にすばる望遠鏡が存在することが前提となっているサイエンスケースが多い中で、現実には厳しく、共存を図るにはコミュニティを挙げての行動が必要であることや、東アジア天文台など海外協力による運用へのシフト、他の8-10m望遠鏡と連携した活動の必要性等が議論された。 スペース計画に関しては、SPICAやWISHをとりまく状況のこの1年の変革について再確認がなされたあと、間近に迫った次期小型衛星公募に関する光赤天連の態度についての議論があった。その中で、宇宙研プロジェクトの各カテゴリにおいて、光赤外コミュニティがそれぞれ何を実現しようとするのかの整理が必要であることも話し合われた。さらに、今後のスペース計画を推進する上では、光赤外に閉じずに、全波長合同・天文学全体でロードマップを構築することが最重要であり、そのための協議を光赤天連として呼びかけるべきとの見解も得られた。 また、サイエンス章において、光赤外コミュニティがどのようなプロジェクトを最優先で実現しようとしているのかが垣間見れるような工夫を施すべきとの方針が議論された。各サイエンスケースの実現に関わるプロジェクトの統一的な表記方法についての具体策について話し合われた。 このように多岐にわたり様々な議論が行われ、編集活動の指針が得られたことは大きな成果である。これらの議事は、光赤外コミュニティ全体の活動の参考となるよう、講演スライドと共に光赤天連のホームページへ掲載している。
その他参考となる事項 (希望事項も含む)	プログラムや講演スライド、議事メモは以下のページに掲載されている。 光赤天連シンポジウム2015HP http://gopira.jp/sym2015/program.html 受付名簿から、3日間の参加総数は102名であり、全国から光赤外分野をカバーする様々な人々が参加したことを見て取ることができる。参加者の年齢層であるが、シンポジウムの内容的に、通常の研究会と比べると高めになることは致し方ないと考えられるが、それでも学生が9名、ポスドク・助教クラスが37名と若手の参加も多かったことは指摘しておきたい。 また、今回のシンポジウムの議論において、今年度2回目のシンポジウムを、年明けの1-2月に、検討書の最終報告や光赤外ロードマップの最終確認を目的として開催することが話し合われた。年度内の期限が想定される学術会議のマスタープランや、宇宙研の小型衛星公募に関する対応も議論される予定である。昨年度も、宇宙研の衛星ミッション公募との関連で、第2回目のシンポジウムを11月末に開催したことがあったが、最近、他機関から光赤天連への注文が増えてきており、光赤外コミュニティを代表するグループとしての活動・議論の必要性が増え、光赤天連シンポジウムの開催意義がますます高まってきていることを肌身をもって感じているところである。 最後に、開催に当たっては、旅費事務や会場準備・受付等において、国立天文台すばる室の手厚い支援を得たことを、感謝の意を表しつつ記しておく。